『文化人類学』投稿規程

※下線部分は、その詳しい内容が学会ホームページ（www.jasca.org）の「投稿に関するよくある質問」（「学会出版事業：『文化人類学』」のセクション内）で説明されていますので、そちらも必ずご参照ください。

１．投稿資格

日本文化人類学会員の方は自由に投稿できます。ただし会費滞納の場合、審査および掲載をしないことがあります。

非学会員との共著による投稿については、学会員が投稿原稿の実質的な主要著者である場合にのみ可能です。また、以下の５で定める特集においては、原則として、特集に関わる原稿（初投稿時）の総頁数（後出の「テンプレート」による換算）の３分の１程度を超えない範囲で非学会員に投稿を依頼することができます。

なお、以上のほか、編集委員会が文化人類学の多面的発展のために有意義であると判断した場合、非学会員に対して投稿を依頼することもあります。

２．投稿条件

本誌に投稿する原稿は、原則として、日本語で書かれた未公刊の原稿に限ります。他の媒体において既発表、掲載予定、あるいは審査中のものは二重投稿に該当し、学会員の利益に資するべき十分な理由がない限り、本誌での掲載は認められません。

また、日本文化人類学会倫理綱領にもとる内容の原稿の掲載は認められません。

３．審査

投稿された原稿を掲載するか否かは、別に定める査読規程に基づいて編集委員会で審査の上決定します。

４．投稿区分

『文化人類学』は日本文化人類学会において、学会員の日本語による研究活動の中心的媒体として位置づけられる雑誌です。本誌には、原著論文、萌芽論文、展望論文、書評論文、特集序論、レビュー、フォーラムという投稿区分があります。この投稿区分についての詳細な内容説明は本規程の付録として掲げてあります。

５．特集

学会員からの自発的な投稿に加え、編集委員会は、学会内での学術的議論の活性化のため、特集の枠を設けています。特集を構成する諸原稿の投稿区分は原著論文、萌芽論文、展望論文、書評論文、および特集序論です。特集の原稿については、審査結果に基づき、編集委員会が、個々の原稿および特集全体の掲載可否を判断します。

６．字数制限

原稿の字数については、原則として、投稿用の「テンプレート」（下記11にある学会ホームページからダウンロード可能）に即した形で制限を設けます。制限字数（特記しない限り図・注・参照文献等、論文本体の全構成要素を含む）は以下の通りです（カッコ内は400字詰原稿用紙に換算した目安）。

原著論文　表紙＋20頁以内（原稿用紙80枚以内に相当、表紙はテンプレートに従う）
萌芽論文　13頁以内（原稿用紙52枚以内に相当）
展望論文　10頁以内（原稿用紙40枚以内に相当）、ただし本カテゴリーでは参照文献は左記の制限字数に含めない
書評論文　６～８頁（原稿用紙21～32枚に相当）
特集序論　展望論文に準ずる
レビュー　２～４頁（原稿用紙５～16枚に相当）

フォーラム　5頁以内（原稿用紙20枚以内に相当）、ただし著書紹介は2頁以内（原稿用紙8枚以内に相当）

以上の要件を満たさない場合は原則として原稿を受理できません。

7．原稿作成と投稿の方法

本規程並びに執筆細則を熟読の上で原稿を作成してください。学会ホームページ上の「投稿に関するよくある質問」にも重要な情報がありますので、ご確認ください。投稿は原則として所定の投稿用テンプレートを学会ホームページからダウンロードし、下記11にある投稿フォームを使って行います（査読後の再投稿、再々投稿の場合も同様です）。ただし特集の場合は編集委員会の指示に従ってください。何らかの特別な事情により他の方法での投稿を希望する場合は、事前に学会事務局に問い合わせてください。

原稿の提出に際しては、誤字脱字がないか細心の注意をもってチェックするとともに、執筆細則に従っているかどうか、再確認をお願いします。

なお、著者が編集委員会に向けて投稿の意図や原稿の背景等を説明する必要がある場合、初投稿時にカバーレターを原稿関係のファイルと一緒に送付することができます。それ以外の場合にはカバーレターの送付は不要です。

8．英文要旨の作成・校閲・提出

英文要旨は投稿時には不要です。原著論文、萌芽論文、展望論文、および特集序論については、掲載決定後、以下で定める語数を目安に、迅速に二種類の英文要旨を提出していただきますのでそれに向けてご準備ください。短文英文要旨は『文化人類学』に、長文英文要旨は*Japanese Review of Cultural Anthropology*に掲載されます。なお、英文要旨は長短ともに英文校閲を行い、投稿者自身が責任を持って本誌に掲載可能な水準を確保することを必須とします。長短の英文要旨が十分な水準に達していない場合、修正されるまで本原稿の掲載が延期されることがあります。

原著論文	短文英文要旨150語程度	長文英文要旨1500～2000語程度
萌芽論文	短文英文要旨150語程度	長文英文要旨1000～1500語程度
展望論文	短文英文要旨150語程度	長文英文要旨1000～1500語程度
特集序論	短文英文要旨150語程度	長文英文要旨500～1500語程度

9．校正

校正は著者校正が基本です。誤りや不統一を含んだまま刊行されることは、著者自身だけでなく、学会誌全体への信頼の低下を招きます。学会員としての責任を自覚しつつ校正に臨んでください。

なお、初校は誤字脱字等の軽微な修正のみが原則であり、初校での大幅な加筆、修正があった場合、掲載延期ないし取り消しとなることがあります。また、組み替え等による必要経費はご負担いただきます。再校は初校段階の訂正を確認するだけの作業となります。

10．抜き刷り

抜き刷りは作成しません。なお、PDFファイルは通常、紙媒体での配布後3ヶ月以内にJ-Stageにアップロードされ、学会員専用のアカウントとパスワードを使ってダウンロードできるようになります。

11．提出先および問い合わせ

投稿原稿（特集を除く）の提出は下記宛にお願いします。

学会ホームページ投稿フォーム：http://www.jasca.org/form_mailer/jjca_form.html

投稿などに関する問い合わせは学会事務局にお願いします。

email:hoya@jasca.org　電話：03-5232-0920　Fax：03-5232-0922

住所：〒108-0073 東京都港区三田2－1－1－813 日本文化人類学会気付『文化人類学』編集委員会

12．著作権、その他

本誌に掲載する論文等の著作権は、日本文化人類学会が保持いたします。掲載にあたって、各著者は学会への著作権委譲の書面をご提出ください。なお、委譲にあたって著者が保持する権利については、「『文化人類学』掲載論文等利用許諾基準」に定めます。

付録：投稿区分詳細

目次項目	特徴と分量	
原　著　論　文 （original article）	独創性。 テンプレートで表紙＋20頁以内（原稿用紙80枚以内相当）	文化人類学またはその特定領域（あるいは境界領域）における、何らかの独創的知見を表現する論文。「独創性」とは、論文で提示されている新規性のある知見（データ、方法、理論等のいずれか）が、分厚い裏付けによって堅固なものとなっていることを言う。なお、求められるのは論文の中心的主張が批判に耐えうる強さを十分に持つことであって、全ての側面における完成度の高さではない。
萌　芽　論　文 （exploratory article）	進取性。 テンプレートで13頁以内（原稿用紙52枚以内相当）	文化人類学またはその特定領域（あるいは境界領域）において、進取性の感じられる知見（データ、方法、理論等のいずれか）を十分な説得力をもって表現する論文。「萌芽論文」である以上、議論として強い側面とやや弱い側面が共存していることは構わないが、後者の側面に関しても一定の態度表明は求められる。このカテゴリーは、新進研究者があまり形式にとらわれずに新鮮なアイデアを表現する場であるとともに、経験を積んだ研究者にこそ可能であるような新たな発想を表現する場でもある。
展　望　論　文 （overview article）	総合性。 テンプレートで10頁以内（原稿用紙40枚以内相当）。ただし参照文献は制限字数に含まれない。	文化人類学またはその特定領域（あるいは境界領域）における重要な文献（論文・書籍など）を、著者独自の、新規性のある視点から総説的・批判的に展望する。新興の領域や近年大きな発展のあった領域に関するレビューを行う場であるのみならず、既存の領域に関して著者が独自に切り開いた研究視角を全体として提示する場でもある。参照文献の一覧は制限枚数に勘定されないため、萌芽論文や書評論文よりも多くの数の文献を一望して包括的に論じることが可能である。
書　評　論　文 （review article）	主題性。 テンプレートで６～８頁（原稿用紙21～32枚相当）	ある主題のもとに、近年刊行されたものを中心とする複数の文献（国内外を問わない）への論評を含めつつ、首尾一貫した新規性のある議論を提示する。冒頭にタイトル（著者独自の主題）と論評の対象となる複数の文献を掲げ、それに本文が続く形になる（もちろん、その中で適宜、他の文献も参照する）。近年の研究展開を踏まえる形で著者独自の学問的アイデアを表現する論考や、当該分野に通じた著者が近刊書について独自の視点から一つの展望を与える論考、といったものが想定される。もちろん、著者自身のデータを部分的に議論の中に組み込んでもよい。
特　集　序　論 （introductory essay for Special Theme）	当該特集の序論として適切な分量。上限は展望論文に準ずる。	当該特集の趣旨や構成に基づき、序論として適切な分量と内容の原稿が求められる。字数制限の基準として便宜上、展望論文のジャンルが言及されているが、これは特集序論のスタイルや分量を特定しているわけではない。
レビュー　（reviews）		目次の大見出しは「レビュー」となり、書名や作品名等が、執筆者名とともに並ぶ形になる。「書評」「映像・展示評」の別は、「レビュー」の下位の投稿区分として正式なものだが、雑誌本体では特に明示しない。
－書評	個別的批評。 テンプレートで２～４頁（原稿用紙５～16枚相当）	注目すべき新刊書の内容についての簡潔な紹介・コメントから、オリジナルな評価や見解を含むものまでを対象とする。
－映像・展示評	同上。 テンプレートで２～４頁（原稿用紙５～16枚相当）	人類学的内容を含んだ映像や展示に関する論評を対象とする。書評に準ずる形式で作品や展示のタイトル等を冒頭に掲げる（細かい情報は注に回す）。批評には、視聴者ないし観客の反応、教育現場その他における活用のあり方など、映像・展示自体の論評にとどまらない内容を含めてもよい。また、人類学系の映画祭や学会で発表された民族誌映画、小規模なインスタレーション等も対象に含まれる。批評対象または批評自体が『文化人類学』に掲載するに値するような内容的新規性を持つことが求められる。

フォーラム（forum）		目次の大見出しは「フォーラム」となり、各表題が執筆者名とともに並ぶ形になる。ただし、著書紹介のみは「著書紹介」とし、個々の文献名は目次には掲げない。他の下位区分名も投稿区分としては正式であるが、雑誌本体では特に明示しない。
－著書紹介	速報性。 テンプレートで２頁以内（原稿用紙８枚以内相当）	学会員を著者または編者とする書籍について、著者・編者自身が学会員に向けて当該書籍のねらいや重要部分を、箇条書き等でなく文章で説明する。インターネットで入手できるような情報は最小限とし、また、客観的記述を旨とすること（特別な理由がある場合を除き、読者に向かって直接語りかけるような言い回しは避ける）。編集委員会は公益性を考慮したうえで、採否や原稿チェック等を行う。編者が多数の場合は、原稿執筆者の学会員が主編者（ないしその一人）である場合に限る。
－討論	対話性。 テンプレートで５頁以内（原稿用紙20枚以内相当）	『文化人類学』掲載論考に限らず、学会員の研究内容をめぐっての誌上での意見表明やそれに対する応答など。編集委員会は公益性を考慮したうえで、採否や適当な分量の判断、原稿チェック等を行う。
－研究報告	速報性。 テンプレートで５頁以内（原稿用紙20枚以内相当）	速報性を旨とし、長期のフィールドワークに基づく暫定的報告、重要な学術的資料の紹介とそれに関する暫定的考察、新規性のある研究方法論に関する簡潔な議論、特筆すべき重要性のある国内外での共同研究の成果等について報告を行う。学会誌の誌面を占める報告であるため、著者の十分な学識に支えられた学問的作業が背景にあることが不可欠である。編集委員会は、公益性を考慮したうえで、採否や適当な分量の判断、原稿チェック等を行う。
－研究動向	情報共有。 テンプレートで５頁以内（原稿用紙20枚以内相当）	国内・国外を問わず、学会や重要なシンポジウム等についてのレビューを行う。ある程度包括的な記述を含むことが望ましいが、執筆者自身の視点を含めた、踏み込んだレビューを中心にしてもよい。編集委員会はあくまでもレビューの内容的充実度によって、採否や適当な分量の判断、原稿チェック等を行う。
－教育・社会・研究活動	実践性。 テンプレートで５頁以内（原稿用紙20枚以内相当）	学会員が知るに値する、新規性を含んだ教育や社会活動等についての報告および考察、また、学会員の実際の研究活動において有益な、例えばフィールド調査の際に役立つ情報提供（治安対策や安全確保、調査許可取得法等）および考察など。編集委員会は公益性を考慮したうえで、採否や適当な分量の判断、原稿チェック等を行う。
－研究史・追悼記事	歴史性。 原則として、テンプレートで５頁以内（原稿用紙20枚以内相当）	資料的・証言的意義を含んだ研究史的エッセイや、亡くなった学会員の追悼記事等。

（2019年12月14日理事会承認）